

2009年10月18日 主日礼拝メッセージ

聖書箇所：ローマ人への手紙 6章 1～11節

説教題：罪から解放されているのです

## 1 喜ばしい死？正しく生きなさい？

聖書を読んでいると、いろいろな疑問が出てまいります。今朝の箇所には、少なくとも二つあります。

私たちはだれでも死ぬということを恐れています。実際に死というものは私を苦しめます。身近な者が死ぬことがあると大きな悲しみを経験します。死はあつてはならないもの。それが常識です。ところが、今朝の箇所を見ると、ここには私たちが知っている悲しい死ではなく、言ってみれば何か恵みに変えられる、そんな喜ばしい死のことが書かれているようなのです。それはどういうことなのでしょう。それが一つの疑問です。

そしてもう一つの疑問があります。1、2節にあります。「恵みが増し加わるために、私たちは罪の中にとどまるべきか。絶対にそんなことはありません。罪に対して死んだ私たちが、どうして、なおもその中に生きていられるでしょう。」

このみことばを思ったかもしれません。「私たちは、すばらしい救いの恵みを台無しにしてはならない。頑張つて罪の生き方をやめて、正しい聖い生き方に進むべきだ。」そんなふうを受けとめてしまい、うんざりしたかもしれません。

今朝はこの二つの疑問について、実際はどういうことなのか、少しずつ見てまいります。

## 2 バプテスマ (洗礼)

### (1) キリストとともに葬られた

私たちは、かつて信仰を告白し、イエス・

キリストを救い主と信じ、バプテスマを受けました。教会によって考え方の違いはありますが、多くの場合、水の中に体全体を沈めるという方法で洗礼を授けます。かつてイエスが洗礼者ヨハネから洗礼を受けられたときと同じように私たちもしようということです。

洗礼式では、「〇〇兄弟 (姉妹)。父・子・聖霊の御名によって洗礼を授ける」と牧師が宣言して、おもむろにからだを水の中に沈めます。単純な儀式に見えますが、そこには意味があります。どんな意味か、イエスはヨハネの福音書の中で解き明かしてくださっています。

律法学者であったニコデモと呼ばれる人があるとき、こっそりとイエスを尋ねて神の国に入るためにはどうすべきかについて、尋ねた場面が出てまいります。イエスは言われました。「人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」(ヨハネ3:3) ニコデモは最初にこのみことばを聞いたとき、おおいにとまどい、こう言いました。

「人は、年をとってからどんなふうにして生まれ変わることができるのですか。母親のお腹にもう一度戻れるわけがないでしょう。」それに対してイエスはお答えになります。

「人は水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることはできません。」(ヨハネ3:5)

この「水」というのが、洗礼の水を現しているのだと考えられています。水に沈められ、そしてそこから起こされる動作によって、私たちが一度死ぬということ、そして続いて新

しく生まれ変わることを現しているのです。もちろん洗礼式という儀式さえすれば大丈夫と言うことではありません。「水と御霊」とありますように、御霊をいただかなければなりません。どうやっていただくのか。神に背いてきた自分の罪を認め、主イエスを救い主と信じて受け入れるとき、私たちのうちに御霊が住んでくださいます。信仰を告白したとき御霊をいただきます。

このように洗礼式では、水に沈められてそこで一度死ぬ経験をします。そのことをパウロはいろいろに言葉を換えて表現しています。「私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。」「キリストにつき合わされて、キリストの死と同じようになっている。」「私たちはキリストとともに死んだ。」

水に沈められたとき、自分ひとりがそこでぶくぶくと死ぬ思いをするものではありません。実は水の中に沈められた瞬間、私たちはキリストが死んでくださったあの十字架にいっしょにつけられていく。あそこでキリストといっしょに死に、そしてキリストとともに葬られたのだ。そういうことを現しております。

## (2) 罪から解放されている

私は入学式とか卒業式のような儀式なんてまったく意味がない。ずっとそう思っていた人間です。ですから最初、教会では洗礼式をするのですと聞いたとき、どうして意味のないことをするのかと抵抗を感じました。

しかし聖書には、意味のないことなど一つも書かれていません。イエスは外側や形式ではない、むしろ内側のこと、私たちの心のあり方に目を留める方です。そのイエス御自身

がバプテスマを受けられました。そして「水と御霊によって生まれなければ、神の国にはいることができません」とはつきりと言われました。

そうしますと、洗礼式は単なる儀式ではないということになります。実に大切なことを私たちに教えるために定められているということになります。私たちは最初救いのみことばを耳で聞きました。目で読みました。聞いて、読んで、そして考えて、信仰に導かれていきました。信じているのだからそれで十分ではないかと思えます。もちろん、信じるだけで私たちは救いをいただくことができます。でも神は私たちに念を押します。私たちのからだ全体で救いを覚えるようにとされます。

からだの水に沈められる経験。それは決して小さな経験ではありません。生涯何度も思い出していく大切な出来事です。からだ全体で記憶するというくらいのことです。水に沈められたとき、自分はキリストとともに死ぬということを経験します。そして7節。「死んでしまった者は、罪から解放されているのです。」

ですから、この死は悲しみの死ではない。いや、喜びの死だと言うことになります。

## 3 罪はなお私たちのうちにあるけれど

### (1) 納得できない

罪が私たちを支配し、苦しめるのは生きてるときだけです。でも私たちは一度水に沈められ死にました。死んだ者には罪は何も力を及ぼすことができない。その結果、「死んでしまった者は、もう罪から解放されている。」確かに理屈の上ではそうかもしれませぬ。

でも、どうですか。納得できますか。おそらく多くの方は納得しにくいように思うかもしれません。もっともだと思います。なぜ納得しにくいのか。一つ大きな理由があります。「あのとき罪に対して死んだ」と言われているけれど、罪がまだあるじゃないか。「罪から解放されるのです」と言われているけれど、私たちが一番悩んでいるのはまさにこの罪のことで。現実には、全然罪から解放されていない。パウロの言っていることと、今の自分の状態を比べたら、全然かけ離れているようにしか思えない。まじめな方は、もしかして自分はクリスチャンとして失格なのだろうか。そんなふうに責めてしまうかもしれない。

## (2) 罪が住んでいる

安心していただきたい。パウロは私たちがクリスチャン失格者にしようとかんことを言っているのではありません。信仰をもってバプテスマを受けた者であるなら、イエス・キリストにある救いを完全にいただいております。その救いを奪うことのできる者は誰もいません。

では、パウロはいったい何を言いたのでしょうか。パウロは、クリスチャンは罪を犯すはずがないと言いたいのか。でも、パウロは7章の後半の所で言っております。「私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないことを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善を行わないで、かえって、したくない悪を行っています。もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行っているのは、もはや私ではなくて、私

のうちに住む罪です。」(7:18~20)

パウロという方は誠に正直な方で、自分の弱さを包み隠さず私たちに明らかにしております。パウロは皆さんもご存じのとおり、よみがえられたイエスから直接に声をかけられ、弟子として召し出された人です。ある時は、弟子の仲間であペテロを叱りつけることがあったくらい、信仰にも伝道にも熱心に邁進した人です。何度も伝道のために旅行をしました。あるときは乗っていた舟が難破し、漂流し、死にかけたこともあります。食べるものがなくなったときもある。盗賊に会うこともしばしばでした。生涯の最期にはローマに送られ、そこで殉教したといわれます。新約聖書のおよそ半分は、パウロの手紙が占められています。私たちの頭の中では、パウロは偉大な信仰者、伝道者というイメージができあがっています。

しかしそのパウロが、したくない悪をしてしまう自分なのだ。自分の中には隠すことのできない罪がしっかりとあるのだと告白するのは。あのパウロが、聖書の中でこう言ってくれていることに私は大きな慰めを感じます。あのパウロも、自分の罪のことで苦しんでいたのだ。ああ、よかった。私と何も変わらない人だった。パウロでさえ苦しんだのだから、私たちが罪のことで悩んでも、当たり前なことだ。

## (3) 「罪の中にいつまでも生きていくことはありません」

パウロのことを見ると、そんなふうにはひとまず安心できます。しかしなお疑問が残ります。パウロは自分の中には罪が住んでいるとはっきりと告白しています。そのパウロが6章のこの箇所では、「罪に対して死んだ私た

ちが、どうして、なおもその中に生きていられるのでしょうか。」と、まるで私たちは今、罪の中に生きていてできないはずだと主張しているように聞こえるのです。どう見ても矛盾している。どういうことか。

いいえ矛盾ではありません。

2節の後半の文章をもう一度見ます。日本語聖書では「どうしてなおもその中に生きていられるでしょう」とあって、もう完全に今の私たちは罪に生きるなんてありえない。そんなふうに取り取ってしまいます。実は原文を見ますと、「生きていられるでしょう」というのが未来形で書かれているのです。ですからこんなふうに言い換えることができる。「私たちは、この先もずっと罪の中で生きていくのでしょうか。いいえ、この先は罪の中で生きていくことなどありえません。」

私たちは確かに今、したくない悪をしてしまいます。私たちのうちには罪が住んでおります。それは曲げられない事実です。けれども、この先もずっとそうなのかというところではない。この先のことは、もう約束されているのです。あなたがたは絶対に罪の中で生きていくことなどありえない。やがてそのようになるのですから、そこに希望を置きなさい。

5 罪に対して死んだ者だと思えることができる

そうしますとパウロの言いたかったことが少し見えてきます。結論から申し上げれば、実は皆さんがすでにしていることを言っているだけのことなのです。

私たちは救われたときからこんなふうを考えることが身についていると思います。「何が神のみこころなんだろうか。何がよい

ことで何が悪いことなんだろうか。」自分の思いではなく、神のみこころに従って歩むべきではないか。いつもできるわけではありませんが、でもとにかく何かをしようとするときまずそんなふうを考えます。もう救われているのだから、何をしてもかまわない。そんなふうを考える人はいません。

神のみこころに沿いたいと願う私たちです。しかし現実には、パウロも嘆いたように、したくない悪を繰り返してしまう私たちです。自分に正直な方であればあるほど、そんな自分の姿を見て落ち込んでしまいます。弱い自分を見て自分を責めてしまうこともあります。また、こんな私ではいけないと、必要以上に自分を追い込むようなことをしてみたり、頑張ってしまうこともあります。

でも今朝聖書は語ってくださいます。11節。「このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。」

弱い私たちです。救われたけれど神に背くことを繰り返す私たちです。自分の中に罪があることは認めざるをえません。でも神は私たちを慰めてくださいます。自分を責める必要はない。罪はあなたを苦しめるかもしれないけれど、あなたは罪に対してすでに死んだのも同然の状態なのです。確かに罪が住みついているので、苦しむことはあるでしょう。でも永遠にそんな状態が続くのではない。だってあなたは、キリストとともに十字架で死んだのではなかったですか。そこであなたは罪に対して死んだのではなかったですか。喜ばしい死をすでに経験しているのですからそれを思い出しなさい。

そしてもう一つのことを思い出さない。  
先にある約束のことを思い出さない。一度  
死んだ私たちは、今度はイエス・キリストに  
あつてよみがえるのです。そのとき私たちは、  
罪の中に生きるなんてことは、たとえそうし  
ようともできなくなるのです。

かつて私たちは死んだ者であること。そし  
てやがて、キリストとともに生きる者になる  
こと。その二つのことを思い起こしながら歩  
みなさい。そのように励ましてくださってい  
ます。